



聞き書き研究会は、江戸川区を愛し、江戸川区で強く逞しく生きた女性の姿を聞き書きとして残すため、江戸川区女性センターの区民ボランティアが2010年に始めた活動です。女性センターは2020年に人権・男女共同参画推進センターに統合され、この活動を所管しています。

## 「まだまだ勉強中」 —下小岩サロンを立ち上げて—

あら い え み こ  
新井 恵美子

1940年(昭和15年)  
江戸川区小岩生まれ  
東小岩在住



### ■ 看護の「か」の字も

関東大震災後、祖父母の代に小岩に移って来ました。わたしは小岩で生まれています。父の仕事の関係で1歳くらいのとき蘇州(中華人民共和国)へ渡っていたと聞いています。家の裏が兵隊の宿舎でした。母は世話好きで、裏の兵隊さんの面倒をみていたようです。そこを終戦前に引き揚げて、小岩に戻って来ました。終戦の時は5歳かな。

食べ物がなくて、庭に畑を作り、さつまいもやジャガイモを植えたり、芋の茎まで食べたりしました。買い出しに行くのに着物や何かを持って農家の人たちのもとへ行き、食料に交換しました。母が病弱で、わたしは背が低く小柄でしたけど、丈夫で機転がきくというもおかしいけど、ちょこちょこことついて行きました。電車に乗るときは窓から乗ったりもしました。日暮里近くに来ると電車が止まるんですよ。駅でもないところで。男の人は逃げるけど、おんな子どもと年寄りも逃げられなくて、没収されちゃうんです。おまわりさんたちに。警察の査察です。

昭和21年(1946年)で小学1年生。国民学校だから男子と女子は別々。2年生で南小岩小学校になりました。3年ぐらいの時かな、母は病弱だったし、父が倒れて。でも、家や土地という財産があると生活保護が受けられず、結局「たけのこ生活」ですか。わたし質屋にも通いましたよ。姉は「わたしの着物持っていっちゃいやだ」と言って泣くから、母のものが無くなって、わたしのものが無くなって。4年生の2学期に福島の実家に、5年と6年と預けられました。その時は学校で「英語は敵国語」だから覚えることないって、ローマ字も何も教えてくれない。まだそんな時代。

小岩に戻って来て、小岩2中に入りました。警察官か教師になりたいって、卒業したら上の学校に行きたいと思っていました。父が入院してまして、看護婦さんたちが看護学校の試験を受けるというので、じゃあわたしも一緒に受けるって。それで受けて看護学校に行ったんですよ。親に負担をかけないように医院に住みこみで、半日間働いて、午後から看護学校へ通ったの。2年間で、准看護婦の資格をとりました。

### ■ 手術室に行きたい

卒業して、板橋の総合病院へ移って、寮生活。上の学校に行きたいからと頼んで、「きちんとお仕事するならいいわよ」と許可をもらって、そこから板橋にあった北園高校に。夜勤のときとかは、学校帰ってきてから仕事ですから。9時ぐらいに帰ってきますでしょ。ちょっと横になるんですよ。寝ちゃうんです。で、12時から仕事です。でもね、いい勉強になりましたよ。手術室の急患があるときには「誰かいないか」と。4時まで仕事だとすると、4時に終わったと同時に遊びに行くと誰もいませんから。手術やったことないでしょ。そばについて、あれやれこれやれと教えてもらって。そしたら、おだてられて「なかなかうまいよ。今度、手術室に入ってやってごらん」て。

結婚することになって、いったん小岩の家に帰ったんですよ。花嫁修業しろと言われて。だけど退屈でしょうがなく。通っていた市川のお料理学校の前が大学病院だったんですよ。大学の病院がどんなものか、学生時代の友だちに見てきてもらったんですよ。「やってみたら」と言われて、行ってみたらその病院に採用されちゃって。病棟勤務だったんですけど、教授回診があったときに、わたしみたいなちっちゃいのが「ちょっとこれやってみて」と言われたけど、「それは医者の仕事です。わたしはやりません」と、断わっちゃったんですよ。婦長さんやみんな、割とビビリしてるんですよ。もう大変だったみたい。今、自分勝手にべらべら話をしていますけど、コミュニケーションの取り方が苦手なんですよ。だから、病棟勤務が苦手。

そんな感じだから、「手術室に行きたい」と言ったんです。手術室に行ったらやはり先輩が付きまよすね、器械出しとか。ある先輩だけがいろんな教授にずうっと付いてるんですよ。自分が誰かについて担当のないときは現場に行ってみ学し、あるいはその先輩にお願いして中に入れてもらい、その方が使った器械を洗っていました。そのときは手洗いですからね。この教授はこれを使うんだ。この手術のときはこれを使うんだ。それを半年ぐらいやって、覚えて。その先輩がこっちの教授に付いていて、あっちの教授に付けられないときがありますでしょ。そのとき

に「誰かやる人いる?」「はいっ」と手をあげて、できなくてもやってきました。

あと、手術がないとき手術を見学したり、何もないときは黙ってそっと図書室に行って、今度何をやるからと調べたり、楽しかったですよ。

フィアンセがいてもデートなんかできませんよね。手術があって、「今日もだめ」「明日もだめ」とやってるうちに、彼のほうが具合が悪くなって亡くなったんです。

30歳ぐらいまでその大学病院にいて、それから3年間看護学校に行って、国家試験受けて看護婦の資格を取りました。

お茶の水の大学病院の婦長さんが、手術室に來いと引っ張ってくれました。そして、2000年に退職しました。60歳でした。

## 居場所づくりをしたい

退職してから3年後かな。軽い鬱<sup>うつ</sup>みたいになってきて、後輩たちが心配して、アルバイトしろと。わたしアルバイトなんかしたことないし、いやだとずうっと断わっていたんですよ。「見もしない聞きもしないで断わるとはなにごとか」と、痛いところを衝<sup>つ</sup>かれ「じゃあ行ってみる」と。保健所だったんです。保健婦さんたちと話をしていた。「いつから来てくれる」「そうね、いつから来ようかしら」という話になって保健所に。その後、障害者施設に派遣されました。最初、どこから手をつけていいかわからなくて。そこは心理・言語・理学療法士がいて、介護士たちがいて、わたしは入所・通所の人たちの具合が悪くなったときしか行かない。だからそんなにコミュニケーションの困難はなかったんですけれどね。顔見て、目見て、こんには、とかね。今年(2019年)3月に退職。結局そこで15年働きました。

福祉関係のことはあまりにも知らないから。それこそ学校で習ったのは昔ですよ。それで人生大学12期生(江戸川総合人生大学2015年入学)へ行ったの。介護福祉科です。

サロンですか。今年4月に立ち上げました。月に1回ですが、デイサービスのようなものです。社協(社会福祉協議会)がボランティアを募ったときの会合に出て、どういふボランティアをしたいかという話になったとき、「居場所づくりをしたい」と「見守りをしたい」と「街づくりをしたい」という3つまで出たんです。そのときに、「居場所づくりをしたい」という方がわたしも含めて10人近く集まったのかな。それで、話し合いをしたり、あちこち見学したりしたけど、最後に残ったのが3人。その3人で社協のバックアップのもとに「下小岩サロン」を立ち上げたんです。

若い方にリーダーになってもらって、わたしは運営の下働き。常時ボランティアの人たちが10人くらい集まります。多いときは15、6人くらい。だからへたをするとサロンに集まる人たちよりも多いときがありますね。小岩ホームさん(熟年相談室)が協力してくれて、軽い手足の体操してもらって。あとは年

間計画を立てまして、講師に来ていただいてお話をさせていただいたり。脱水症や虚弱体質のこと。お坊さんの話、これは宗教に関係ない「心の持ち方」なんかで、おもしろい話でしたけど。あとは折り紙や、声楽の人に来てもらって歌を歌うとか、最近手品です。すすくすくスクールの子どもたちとの交流もあります。ゆくゆくは自分の住む町会でサロンを立ち上げたいと思っています。

## 生まれた家で暮らす

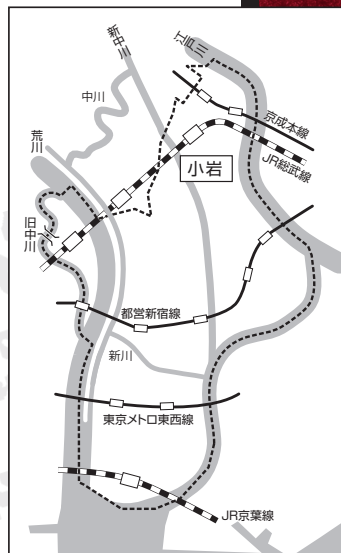
家族がいる時は、庭に犬を飼って放し飼いにしました。だんだんいなくなって、最後の犬も老衰で亡くなって。末の弟が「ひとりじゃさみしいでしょ」って、獣医さんから猫をもらってくれたんですよ。姉の子どもが来て、猫をさかさまにして強く抱くも



◆タワーホール船堀の展示会にて

んだから、猫は逃げちゃったんですよ。それから1年経って戻って来たんです。でも違う猫だったの。それからいつも猫が居るようになって。扉のところに子猫が来ますでしょ。鳴くと新生児の赤ちゃんが泣いてるようで、気になって気になって。1匹入れ2匹入れしているうちに、いちばん多い時で18匹かな。少ない時で12、3匹はいましたよ。いまは20歳を超えた猫が呆けてしまって、朝方からぎゃあぎゃあ鳴いています。

お習字と水墨画と、あと俳句やっています。お習字と水墨画はちょっとお休み。でも、俳句だけは投句すればなんとか続けていける。人生を五七五にまとめられたらいいなと思うけど。わたしの俳号は「三八五」、小学校入学前になくなった妹の名前です。3、8、5で16ね。俳句は17字。1文字足りませんでしょ。だからまだまだ勉強中なの。



◆インタビュー／2019年6月  
2019年7月  
◆聞き手／岡西和子 山本國子 村田正子  
◆コーディネーター／樋口政則

◆お問い合わせ◆  
総務部総務課  
人権啓発係  
☎6638-8089